

# ユニバーサルデザイン特集によせて

パナソニック（株）デザインカンパニー

社長 根岸 豊



特集  
1

ユニバーサルデザインは、「年齢、国籍、性別、能力、身体的な特性などの違いにかかわらず、すべての人々が、生活の不便さを感じることなく、製品・建物・環境をできる限り、快適に利用できるようにする概念」で、1980年台に米国の建築家であり、工業デザイナーでもあった故ロナルド・メイス氏により提唱されました。

グローバル化の進展、技術の進化、先進国を中心とした高齢化社会の到来、そして新興国の経済発展など、近年の社会を取り巻く情勢を考えると、このようなユニバーサルデザインの考え方がますます大切であると感じます。

当社は1918年の創業以来、常に「人」を中心に置き、その「くらし」に焦点を当てて、お客様と共に歩んでまいりました。その「人にやさしいモノづくり」は当社のDNAと言えます。より多くの人々に配慮して、使いやすさを追求するユニバーサルデザインは、「人にやさしいモノづくり」に欠かせない要素であり、当社の商品・サービスへ積極的に組み入れております。

また、当社がお役に立ちたい場（空間）として、「住宅空間」はもちろん、オフィスや工場、店舗や病院などの「非住宅空間」、車や航空機などの「モビリティ」、そして「パーソナル」という4つの空間があります。ユニバーサルデザインについても、これら4つの空間で、徹底して人を見つめて取り組むことで、パナソニックならではの新たなお客様価値を創造し続けたいと考えています。

近年、デジタル化の進展は急速に加速しており、13歳以上のインターネットユーザーの4割が既にスマートフォンを使用し、このペースが続けば来年には全人口を母数にした普及率で過半に達する見込みとも言われています。白物家電でも多機能だけでなく、ネットにつながり機能するような商品がますます出てきます。したがって、そうした商品では、高齢者や障がい者の方にも配慮した操作性を十分に実現するための対策が急務と考えます。

一方、2012年10月に福岡で第4回国際ユニヴァーサルデザイン会議が開催され、当社もブースを出展すると

もにセミナーを実施しました。事後に行ったアンケート結果からは、身体面の負荷だけでなく、心理面での負荷の軽減にまで踏み込んだ、新しいユニバーサルデザインの取り組みへの期待が一番高かったのが印象的でした。

このようなことを踏まえ、ユニバーサルデザインの元々の定義にある、年齢、国籍、性別、能力、身体的な特性などの違いにかかわらず、すべての人々が快適に利用できるようにすることに、われわれの使命として引き続き真摯に取り組みながら、多くの方々に使ってみたいと思っていただけるような心理的なアプローチにも、積極的に取り組む必要があるのではないかと考えます。

ユニバーサルデザイン特集は、今回で3回目となります。内容も、製品事例から評価手法、研究事例まで幅広く、身体負荷の軽減から心理的なアプローチまでも含めたものとなっております。また、海外の事例も幾つかご紹介しており、前回までにない広がりを感じる内容となっております。

今回紹介されている海外のユニバーサルデザインという観点でもう少しお話しします。VIERAの音声ガイド機能は、視覚障がい者の方も含めた多くの方からご好評を頂いており、2012年にイギリスで王立盲人協会（RNIB）賞や、2013年1月のCESでは、イノベーションズ・デザイン&エンジニアリング賞、アクセシビリティ & ユニバーサル・デザイン部門においてベスト・イノベーション賞（The Innovations Design and Engineering Awards: Best of Innovations Honoree, Accessibility & Universal Design Category）を頂きました。また、Wヘッドアイロンをはじめ複数の商品がドイツのUniversal Design賞を毎年頂いており、国際的評価においても実績が上がってきたことを実感しております。

今後も、パナソニックのさまざまな事業領域で、さらに引き続きお客様起点でユニバーサルデザインにしっかりと取り組み、お客様価値を最大化する活動が加速することを目指してまいります。本特集をご高覧いただき、忌憚のないご意見・ご指摘を頂戴できれば幸甚です。